

緑を守り育てる

伝教大師坐像周辺の樹木

伝教大師でんきょうだいたしの坐像は、佐谷観音谷の建正寺から少し下った道沿いにあります。祠ほらは、杉やヒノキなどの大きな古木に囲まれて建っていて、これらの古木13株が保存樹に指定されています。このうちキンモクセイは、根



元から2メートルほどのところで折れていて、そこから出た枝が幹となり、キンモクセイとしての面目を保っています。また、イチヨウの木も同じように、地上数メートルのところまで大きな幹が折れているなど、樹齢150年を越すといわれる樹林の年輪を感じさせます。

ところで、伝教大師（天台宗の開祖 最澄）の坐像は、庭内にある小さな水場「得好水とくすい」に映った自分の姿を見ながら、大師みずから像を彫ったと伝えられています。

また坐像は、受難の連続であったといわれます。須恵町に大災害をもたらした昭和48年の水害の際には、坐像を祀っている祠が、倒れてきた樹木とともに倒壊して、坐像も下敷きになってしまいました。幸い坐像そのものは無事で、地元の人たちをほっとさせました。

また、明治時代の初めごろ坐像の盗難事件がありました。賊が、福岡市の箱崎浜から船で持ち去る寸前のところを、夢のお告げで探しに来た地元の人たちが取り返して難を逃れたという話も伝わっています。

（自然教育林推進協議会）

須恵町青年団OB・小学校の先生らが 社会科副読本づくりを推進

青年団OBや町内小学校の先生ら（「わたしたちのまち須恵」編集委員会 吉松 輝会長以下16人）が小学生の社会科の副読本づくりに取り組んでいます。

平成17年7月からこの副読本づくりの組織となる編集委員会を発足させ、毎月第4金曜日午後7時からアザレアホール須恵に集まり、編集方針や企画内容、執筆の役割分担を決めるなどして推進しており、発刊は、平成

20年3月末の予定です。

同委員会からメッセージが寄せられましたので紹介します。

また、編集趣旨や進捗状況など詳しくはアザレアホール須恵別館2階に設置された同編集委員会事務局（毎週金曜日）の午前

9時から午後5時まで開設、吉松までお尋ねください。
☎934・0030（内線623）

二十一世紀の郷土が 心豊かな明るい時代に

約30年位前から町村合併が話題となり、進んで議論をされたり、また何時の日か立ち消えになったりした事が何回かあった中で「須恵町」という町名が消えて無くなるのではとの思いが町民の中にありました。

そのことと相前後して青年団という青年の社会教育組織が時

12月定例議会人事

任期満了に伴う人権擁護委員の推薦人事が、12月定例議会に提案され、現人権擁護委員の恵良剛明氏が推薦されました。



恵良 剛明氏

任期 3年間（平成19年4月1日～平成22年3月31日）

職員人事

1月1日付で、職員の人事異動と昇格が次のとおり行われました（内は旧所属、旧役職）。

- ▼異動・昇格 ▼総務課理事（総務課理事兼課長）木原秀幸 ▼総務課課長（総務課参事）合屋栄一 ▼税務課付課長（税務課参事）百田順二 ▼社会教育課課長（社



会教育課参事）吉松良徳 ▼総務課参事（総務課課長補佐）長田フミエ ▼総務課参事（総務課課長補佐）今泉俊裕 ▼建設産業課参事（建設産業課課長補佐）安河内久人 ▼子ども教育課参事（子ども教育課課長補佐）畑江達也 ▼総務課課長補佐（住民課課長補佐）園田守

▼退職（12月31日付） ▼櫻木正義（教育委員会理事兼社会教育課課長） ▼吉松正幸（企画課付課長）

新春に咲いた菜の花

自然教育林推進協議会では、須恵川畔美化モデル地区の事業の一環として、去年の9月下旬、須恵区の巡り原広場そばの川沿いに、早咲きの菜の花「カンザキハナナ」の種をまきました。30cm間隔くらいに穴を掘り、そこに数粒づつの種を蒔いて肥料を施しました。

「ハナナ」は、順調に芽を出して成長し、新春には見事に花を咲かせました。季節外れの菜の花に、足を止めて鑑賞する人もいました。

自然教育林推進協議会では、一昨年は、上須恵区の熊本橋の下流に菜の花を植えています。将来は、小中学生や地元の人たちと協力して、須恵川の上流から下流まで、兩岸に菜の花を咲かせて、



寒咲き花菜

カンザキハナナ

町の「イエローベルト」として、多くの人たちに親んでもらう夢も描いています。



編集委員会風景

代の成り行きが原因なのか平成になって明治20年から続いていた青年教育団体が消えて行きました。

その青年団に籍を置いていた者で「100年の歴史が有り、貴重な教育組織の幕引きに何か残したら」折々の集まりのときに話題に上っております。

「平成の大合併」も全国的に行われ、近々粕屋地区内も町長会が中心となってその目的に向かって動きだしました。

それが実現しますと、常識的に合併をした新市の市名に須恵という名が残るとは考えられません。

この様な中で元地域青年団は社会教育団体の中心となり「よりよい町民」を目標としていた

ことから「わたしたちのまち須恵」という小・中学生向きの副読本をつくり、市名などが如何に変わろうとも現須恵町地域を担って行く子どもたちに贈ることが時宜を得たものともふさわしい事業ではないかと考えました。内容は当然、わが町が今日に到る迄の先人の労苦を伝えながら、将来に向かって、現在何をどう考え、行われているかを記し、二十一世紀の郷土が心豊かな明るい時代となるようにとの願いを書き残すことにしています。

町内の小学校・中学校の先生たちにも協力いただき作業を進めています。町民の皆さまにこの事業のご理解とご支援をいただき町の負担をあまりかけずに出版したいと思ひ資金作りも行っています。趣意書も用意しております。青年団に関係された方も、また今まで他町に居住されていた方々もこの趣旨にご賛同、ご協力を賜りますと、より一層この事が成就するものと思ひお願ひする次第であります。

編集委員会一同